

生は書き初めて富士山を描いたという狂歌を残しているが、富士山頂に登ったことがあるのだろうか。」とか、「登ったことがないとすれば、葛飾北斎が描いた『富嶽三十六景』の頂角70度から80度の天空に聳え立つ富士山と、120度前後の実際の富士山を見比べて、この狂歌に共感し、引用したのだろうか。」とか、興味や疑問が止処もないのです。

さらに、五無齋先生が39歳のときに刊行した狂歌集「よいかをほしな百首け」を読んでも、軽妙な漫才よろしく突っ込みを入れたことばかりなのです。

このような疑問の中で、特に次の二つのことがらについては、何としても本当のこと、事実を知りたいと願っています。肝心なことも知らんで……、と五無齋先生が草葉の陰で苦笑されておられるような気がしてならないのです。

一つは、五無齋先生の本名です。

学校教育の場をはじめ、一般的に定着しているのは、本名が「百助」で、号(雅号・ペンネーム)が「五無齋」です。

一方、本名は「百助」で、「百助」は、「五無齋」や「蜻洲」、「山千川千居士」などと同じく、先生の号の一つであるという説があります。その根拠は、次の六点です。

①「長野県歴史人物大事典」(郷土出版社)に、「本名は百助」と明記されてい

る。執筆担当の中村一雄は、「長野県教育史全18巻」を編集し、「信州近代の教師群像」などを著した方で、長野師範学校卒業生名簿などで確認したとのことである。

②「郷土歴史人物事典 長野」(古川貞雄編著 第一法規)も、「本名 百助」と明記している。

③ 蓼科組合高等学校と蓼科組合実業補習学校(現蓼科高等学校)の訓導兼校長の五無齋先生を、実業補習学校卒業生が、「ほしなもすけ先生」と呼んでいたという逸話がある。

④ 地元の新しい人が、「五無齋先生の姪御さんが、生前、『ももさん』と読んでいた。」と語った。

⑤ 小倉百人一首の撰者、藤原定家(1162~1241)の名は、元々訓読みの「ふじわらのさだいえ」だが、唐風唐様に、音読みで「ふじわらのてい」か、とも呼称したように、江戸時代末期も、人名で用いる場合、「百」は音読みの「ヒヤク」や「ハク」ではなく、訓読みの「もも」が通例であった。

⑥「百助」の名は、父親の丈左衛門が、明治元年生まれだから、百年後の明治百年まで長生きしてほしいと祈念して付けたという言い伝えが残っている。だが、慶応4年(1868年)1月1日に遡って明治元年1月1日とする改元

の詔書が出たのは、その年(1868年)の10月23日である。したがって、五無齋先生が生まれた時点の年月日(慶応4年6月8日)においては、当時の庶民には明治元年という認識はなかったと思われるので、「明治百年まで長生きして……。」という命名の由来は後日物語ではないか。

両親の位牌と見て、このふじわらのさだいえ、ふじわらのさだいえ、と書かれています。



この点について、数年前、五無齋先生について詳しい方に尋ねますと、その根拠には触れず、「本名は、『ひやくすけ』で、『本名ももすけ』とする人物事典は間違っている。」とお答えになりました。

世の中には、説明のできない事実や根拠など皆無の事実が数多ありますので、客観的な根拠を求められても、お答えの仕様がなかったのだと思います。

五無齋先生の本名は、「百助」なので

しょうか。それとも、「百助」なのでしょうか。

もう一つは、北佐久郡川西出身の二人の俊傑——五無齋先生と、協和村(現佐久市望月)で生まれ、後に「現代書道の父」と称された比田井天来先生(1872~1939)——の関係についてです。

二人の交わりに関する史料も口伝も残っておらず、その史実は全く分からないのですが、直線距離1里半程(約6km)の山部と協和に誕生し、共に、新しい道を切り拓く先駆者として、後進を導く教育者として、筆意・筆勢の能書家として、そして、世人を啓発する著述の人として、同じ時代を颯爽と駆け抜けた4歳違いの二人の偉人英傑が、互いの存在を知らず、意識し合うこともなかったと考えるのは、まことに不自然なことと思われるからです。

この二点についてご教授いただきますれば、幸甚の至りに存じます。

《参考・引用図書》

- 「信濃公論復刻版」立科町教育委員会
- 「五無齋保科百助全集」佐久教育会
- 「五無齋保科百助評伝」佐久教育会
- 「詩伝・保科五無齋」三石勝五郎
- 「私を変えた源流」中山英一 ほか